

<<東北魂>>を鼓舞する
電子新聞

発行所 株式会社遊無有

〒207-0005
東京都東大和市高木3-315-1-2-2
http://www.yumuyu.com/
e-mail:yumuyu@wj8.so-net.ne.jp

東北復興

Rising up, TOHOKU!

無料

第42号

毎月発行

創刊2015年(平成27年)11月16日 月曜日

2015年(平成27年)11月16日 月曜日



津波

**4年8カ月経った今だから
こそ分かることがある
注意!
刺激の強烈な写真があります**

これまでの四年八カ月
を振り返る

この十一月十一日で、東
北大震災発生から四年八カ
月が経過した。
大胆に言わせてもらえば、

ここまでの経過を概観する
と、ほぼこの四年八カ月と
いう時間は、大震災発生直
後の緊急的なインフライン
確保、その後のインフラ等
の急激な復旧作業と、第二
弾の本格復旧対応に費やさ
れたとくることができると
ではないだろうか。
そして第二弾の本格復旧
作業は大きく遅れ、予算執
行も遅れ、それらの遅れを
どうしたらいいのかという
堂々巡りを繰り返して、結局
何も大きく改善せず、遅々
として前進しない状況が続
いている。
その一方、福島第一原発
放射能漏洩問題はほとんど
何も解決していない。政府
はどうにもならない状況を
隠そうとし、国民の目をそ
らそうとしている。
こうした遅れのため、い
まだに多数の被災者の方々
が避難を余儀なくされてい
る。復興庁の発表によれば、
ことし十月三十日時点での
避難者総数は約十九万一千
人という。
この四年八カ月という時
間のうちの大半は、この一
進一退の検討と対応に費や
されてしまった。なんと
いう無駄であろう。
また、この間、国民の東
北大震災への関心は薄れ、
特に被災地は置き忘れられ
た感情に捉えられ、孤独感
と閉塞感が増大している
というのが実情ではないか
というのが追いつけをかける
ように、福島第一原発の放
射能漏えいに伴う風評被害
が重くのしかかっている。
避難されている方々は、
行き場のない怒りやもろも
ろの感情が心身をさいなみ
絶望の中に突き落とされた
ままである。
置き忘れた課題
それにしてもと思うこと
がある。
こうした復旧作業の遅れ
はまことに由々しき問題で
はあるが、復旧作業という
目に見えることだけに関心
を集中し、あの大震災で突
きつけられた他の大事な問
題を忘れてはいないかと危
惧するのである。
つまり、われわれ日本人
は、あの大震災で最もショ
ックを受けたことは何だっ
たのかという議論がすつた
り忘れ去られているように



火災

思えてならないのである。
筆者は、今回号の新聞記
事を書くため、久しぶりに
東北大震災発生直後のたぐ
さんの写真や動画を見た。
見た途端に、当時の生々
しく激しい感情が蘇ってき
た。そして、心の中にずっ
しりと重みを実感する感情
に真正面から向き合うこと
になった。
当時、この大災害をけっ
して忘れないようにしっか
りと頭に刻み込むため、約
半年間、ウィークデイは仕
事から帰ってから深夜まで
休みの日は朝から夜まで、
時間の許す限り、地震と火
災と津波と福島第一原発の
映像を繰り返し見ていた。
半年間は寝不足状態が続
いたはずだが、眠いと感じ
たことはあまりなかった。

四年と八カ月経って、あ
の当時のままの感情が復活
したので。
**心のショックはまだ
何も解決していない**
この紙面には、三枚の写
真を掲載してある。どれも
ショッキングな写真であり、
思い出したくないという
方々は、この紙面は飛ばし
て欲しい。
しかし、そうでない方は、
ぜひこれらの写真をじっくり
見て欲しい。説明は不要
だろう。
きっと筆者と同じように
感じるだろう。
すなわち、震災直後のあ
の生々しい感情が蘇ってく
るだろう。
そして復旧作業の遅れと
いう次元の問題ではない他

の根本的な問題が置き去り
にされていることに、もし
て自らもこの間その問題か
ら眼を背けようとしていた
ことに気づくであろう。
さらに、まだ大震災の精
神的なショックに真正面か
ら切り込んでおらず、ふた
をして、日常世界に逃げ込
んでいるが、何とも居心地
の悪い状況が続いており、
この先もこの問題から逃げ
られないと感じることだろ
う。
いくつかの映像のなかに、
車も人も家々も次々に津波
に流される状況を見ながら
悲鳴を上げている人々が映
っている。
彼らは、物理的な破壊的
パワーを見せつけた津波の
威力に悲鳴を上げていたわ
けではない。
生活のベースとも言える
すべての根本的な価値観が
破壊されたことに悲鳴を上
げたのである。
**大震災の真の意味は
これから考える**
哲学者や社会学者などよ
りもいち早く時代の空気を
先取りするといわれている
鋭敏な各界のアーティスト
たちも、まだあの大震災の
意味について納得できる解
決策(作品)を示せていな
いように感じる。依然とし
て試行錯誤が続いているよ
うに見える。
あまりにも大きい課題だ
からであると思う。



福島第一原発

的な影響だけではないはず
だ。精神的な面においても
千年に一度の課題であった
のだ。
しかし、精神的なエリア
で千年も遡るような訓練は、
近代の日本にはないだろう。
底の浅い、借り物で塗り
固めた接木のような近代の
日本という枠組みの中では
収まりきらない課題であ
らう。
ならば、アプローチを変
えるべきである。時間のも
のさしを差し替えるべきで
ある。
**百年、数百年、さら
には千年遡ってみよ**
ほとんどの日本人はあ
の大震災が突きつけた課題は
直感しているはずだと思う。
ただ重過ぎるのである。

大きすぎるのである。どう
切り込めばいいのか途方に
暮れているのだと思う。
できれば忘れてしまいた
い、日常のありふれた生活
に戻りたいのである。
しかし、あの大震災はそ
れを許さない。どこまでも
ついてくるのである。
ならば、真正面から向き
合うべきである。
四年八カ月経った今だか
らこそ、他の課題に忙殺さ
れずに真摯に向き合えるは
ずである。
大震災前の日本の、フワ
フワしたとらえどころのな
い、根無し草のような空気
から脱出して、この百年、
いや数百年、もつといえ
ばこの千年の、日本と日本
人の来し方を振り返るべき
である。

ぜひとも東北被災地で「2020東京オリンピック」を開催すべきである!

東京オリンピック 2020が東北で一部開催か

先月、英国を訪問中の遠藤利明五輪相が、国際オリンピック委員会(IOC)のバッハ会長とロンドン近郊で会い、2020年東京五輪・パラリンピックの追加種目の1次リーグを地方で開催するよう要望した。バッハ氏は、追加種目が来夏のIOC総会で決まることから「これから議論される」と述べるにとどめたようだが、遠藤氏は、追加種目に提案された野球・ソフトボールについて福島県を含む地方で開催したい意向を示しているというニュースが飛び込んできた。具体的な議論や決定はこれからであり、予断は許されないが、当新聞は、以前

(当紙面下段参照)から東北での開催を提言し、多くの関係者にもアピールしてきたので、ぜひ実現してほしいと願っている。

東北での開催は国際的にも必要である

今度の東京オリンピックで、東北被災地を抜きにしての開催・運営は国際世論も許さないだろう。なぜ東京とその近辺だけの開催なのか、東北を放置したままのオリンピックなど考えられないと責められるのは間違いない。

むしろ、当新聞の主張するように、『東京オリンピック』ではなく、『東北ー東京オリンピック』として奇跡的な復興をアピールすべきところではある。

それほど世界の注目を浴びた大災害であったし、いままも関心は高いはずである。しかし、名称変更の件は譲ろう。いまさら蒸し返しても時間がない。すでにエンプレム問題で大きく遅延しているはずだ。

残された手法としては、競技の一部開催を東北被災地で実施することであり、そのための環境整備を東北の関係者は急ぐべきである。

東北被災地の復旧と復興を促進させる

当新聞は、特別な目的もなく、単に東北被災地に注目を集めることのみをもちて競技の一部開催を望んでいるわけではない。

震災発生から四年八ヶ月経過しての現状を踏まえる、オリンピックを契機にした東北被災地の活性化なしには、東北被災地も東北全体もどんどん落ち込んでいく可能性が高いといわざるを得ない。

他に代案があるならばいいが、そうした代案がいま東北にあるだろうか。たとえ東北での開催規模が小さくとも、それを活用しない手はない。

開催による周辺事業は十分に期待できるし、それをつきかきとした東北被災地と東北全体の底上げを画策すべきである。

開催の具体的な目的

まず第一点は、東北での競技開催で、遅れている復旧・復興作業を急がせることが目的である。

このままではどんどん遅れるばかりである。現状のままでは打開策も思いつかない。その結果はきつと惨憺たるものになるだろう。

具体的な開催場所が未定の状況では何ともいえないが、開催する以上、開催地近辺の復旧と復興は、国際的にも急ぐことは至上命題化するはずである。

あちこちに瓦礫が散乱していたり、インフラが完全に復旧していない状態を、集まった世界の人々の眼にさらすわけにはいかない。

第二点目は、内外から人を呼ぶということである。人が集まれば、地域は活

性化する。国内外から人が集まれば、そこにイベントが出来、産業の芽が生まれ、街が出来、地域全体が活性化される。特に海外から集まれば、観光事業が活性化される。海外との交流も活発化する。

今年、観光を目的とした訪日客が史上最高の人数になろうとしているのに、唯一東北だけが減少している現状を何とか変えよう。観光事業は特別な設備投資と何年にも亘る事業期間を必要としない産業であり、東北の観光資源を世界に発信する絶好の機会である。

第三点目は、再度、東北を世界に発信するということである。

東北文化をしっかりと定義づけして、他との差別化をして、発信することである。そして、自分たちの文化に自信を持つと言いたい。他からの評価は高いが、自己評価が低いのが東北の最大の特徴である。

そのため、再度東北文化の掘り起こしを提案したい。

こうした提案について、これからみなで一から議論しようというのは止めよう。時間がないし、これまでもたくさん時間があったも大きく実を結んだものはなかった。

だから、議論よりも行動をすべきである。もう時間がないのだ。

まず行動しよう、議論は無用である

東北被災地を契機とした【東北観光立国】の提言

【東北ー東京オリンピック】への名称変更とオリンピック競技の被災地との共同開催要望

当新聞第3号(2012.8.16発行)記事より抜粋

当新聞は、「東京オリンピック2020」決定前の三年前、第3号(2012.8.16発行)において、「東北ー東京オリンピック」への名称変更とオリンピック競技の被災地との共同開催要望をあらゆる関係者に送付している。

謹啓 東京都知事 兼 東京2020オリンピック・パラリンピック招致委員会評議会議長 石原慎太郎さま
「東北ー東京オリンピック」への変更に関するお願い

- 東北6県知事殿
- 東北選出の国会議員殿
- 東北の市町村長殿
- 東北6県の県議会議員殿
- 東北の市町村議会議員殿

オリンピック開催を契機とした【東北観光立国】の提言

当新聞第3号(2012.8.16発行)記事より

東北大地震で東北の観光産業は大きく落ち込んだままである。なかでも落ち込みがひどいのは、震災の被害が大きかった沿岸部、そして福島である。回復するには何か大きな仕掛けが必要である。それが

「東北ー東京オリンピック2020」になれば良いと心から思う。オリンピック開催のメリットは、経済効果であり、そのうちで最も大きい効果は観光事業である。日経新聞によれば、いま開催中のロンドンオリンピックの開催前試算では、全体の経済効果が6700億円、うち直接的な観光関連収入が65%、観客のホテル利用やレストラン利用などで20%、マスコミ人形や大会グッズで5%、これらを合計すると実に全体の90%、金額にして6000億円以上である。ロンドン市内のホテルでは、開催中の値上がりを見込んで、事前に大幅な値上げをしたために、閑散としているという話も一部

にあるが、あまり欲張らなければ、自然に収入に結びつくはずだ。これが、「東京オリンピック2020」が実現したとすると、経済効果はロンドンよりはるかに大きく、東京都試算では3兆円ということである。単純計算をすれば、このうち90%が何らかの観光収入とすれば、実に2.7兆円という金額になる。もし「東北ー東京オリンピック2020」が実現したとすれば、最低でも1/10程度は東北に効果が出る。そして、2700億円である。自然体でもそうであれば、この機会に東北全体で「観光立国・東北」を目指せば、1/10が、1/5になり、1/3にもなりうる。いまは単なる皮算用であるが、

ぜひ現実にもしたいものだ。東北の観光産業は、もっと活性化できる余地があると思う。東北は自分たちが保有している資産にあまり頓着しないところがあまり少ないところがある。もう少しそうした資産の掘り起こしに努力すれば良いと思う。2020年までにはまだ8年という時間がある。それまでに観光事業を強化し、より大きな経済効果を引き出し、観光産業の裾野拡大、雇用創出、関連産業の起業や既存企業の拡大も目指そうではないか。それは十分に期待できると思う。そうならば、農業・水産業がメインの東北に、観光という新たな産業の柱が出来る可能性がある。また、そうならば、経済効果は、オリンピック開催

期間中だけではない。日本の東北から、世界の東北に脱皮し、積極的に観光地として売り出していけば、恒常的な収入が期待できる。そして何より、東北には多くの観光資源があることを忘れてはならない。さまざまな自然であり、観光地であり、農業分野・水産分野の多様な食材である。東北の暖かいもてなしもある。これを組み合わせ、世界に例のない観光事業を創出することに挑戦しようではないか。このプランを進めていけば、観光産業の拡大で、従来の課題であった少子高齢化、過疎化という根本的な課題にも光明が見えてくる。良いことだらけである。やらない手はない。

日本酒豆知識

知っているようで意外に知らない日本酒に関する知識、まずはどんな作り方があのかを見てみましょう

ていました。

現在は、大吟醸酒、純米大吟醸酒、吟醸酒、純米吟醸酒、本醸造酒、純米酒と

区分されています(左図)。

「吟醸」と名の付く酒は、「吟醸造り」をした酒で、吟味して醸造することを指し、伝統的に、よりよく精米した白米を低温でゆっくり発酵させ、粕の割合を高くし、特有な芳香(吟香)を有するように醸造します。

*米、米麴、醸造アルコールの他に、糖類、酸味料、アミノ酸塩等が少しでも含まれていたり、アルコールの添加量が白米1tあたり100%アルコールが116ℓを超えるもの、麴歩合が15%より低いものは「普通酒」になるとのことです。

よく大吟醸が最高とか、純米が海鮮に合うとか、ひやおろしの季節とか、日本酒専門用語が氾濫していますが、意外にも正確にその意味を把握している人は少ないと思います。そこであらためて今回は、よく耳にする日本酒関連用語入門編をご紹介します。

【特定名称酒について】

昔は「級別」といって、特級、一級、二級と分類し

精米歩合	40%	50%	60%	70%
アルコール添加無	純米大吟醸	純米吟醸	純米	
アルコール添加有	大吟醸	吟醸	本醸造	普通

大吟醸酒	精米歩合50%以下、麴歩合15%以上、若干のアルコールを添加。
純米大吟醸	精米歩合50%以下、麴歩合15%以上、アルコール添加をしていない。
吟醸酒	精米歩合60%以下、麴歩合15%以上、若干のアルコールを添加。
純米吟醸酒	精米歩合60%以下、麴歩合15%以上、アルコール添加をしていない。
本醸造酒	精米歩合70%以下、麴歩合15%以上、若干のアルコールを添加。
純米酒	精米歩合による規定はない、麴歩合15%以上、アルコール添加をしていない。

【ひやおろし・しぼりたて】

夏の間は蔵内で貯蔵し、秋に出すのを「ひやおろし」、搾ったばかりのものを「しぼりたて」といいます。

【日本酒度と甘辛】

甘口、辛口はよく聞きますが、それは数値で表されるものではなく、全体の味のバランスに大きく左右されるものようです。

甘辛の参考基準として「日本酒度」があります。

±0を基準として、(+)の数値が大きいほど辛口、(-)の数値が大きいほど甘口とされていますが、これは清酒の比重を表した数値であり、これだけで甘辛が決まるというわけではなく、あくまで参考値です。

【火入れか生酒か】

酒を造る工程で、最後に「火入れ」という安定した製品造りには不可欠の作業があります。この作業の有無、回数、実施時期により呼び名が変わります。

通常は、搾った後に一度火入れをして貯蔵し、貯蔵した酒を製品にする前にもう一度2回目の火入れをします。「火入れ」のまったくないのが「生酒」。生の状態で貯蔵し製品にする前に一度だけ火入れをした「生貯蔵酒」。搾った後に一度火入れをして貯蔵。製品前の火入れをせずに瓶詰めした酒が「生詰酒」です。

【原料米】

全国では80品種以上もの酒造好適米が栽培されています。なかでも、山田錦、五百万石、雄町、美山錦、といった品種が有名です。

第15回 水産業再興のための料理レシピ紹介

【簡単ハワイのガーリックシュリンプ】

— 材料 —

殻つきの海老 10本
にんにく(さいの目) 2片
オリーブオイル 大5
白ワイン 大2
鷹の爪 少々(粗みじん)
塩・コショウ レモン汁

— 作り方 —

- ①エビは洗い、背中をハサミでチョキチョキ切って、背わたを取り除きます。塩・コショウ・ワインで下味をつけて寝かせておきます。
- ②フライパンに油を敷き、エビを焼いて火を通し、オリーブオイル・にんにく・鷹の爪を一緒に入れます。さっと火を回して仕上げます。(にんにくを焦がさないようにします)



「ガーリックシュリンプ(完成)・・・新鮮な海老でハワイの味を楽しめる簡単料理。海老が赤く食欲をそそり、ボリューム感たっぷり。」



郷土料理愛好家
松本由美子氏



にんにくを焦がさない



さっと火を回す



フライパン投入



新鮮なエビ

東日本大震災被災地からの伝言

被災地から伝えたいメッセージ

本紙第39号でも書いたが、私は「夜考虫」という集まりで、震災関連のプロジェクト「記憶の記録プロジェクト」「田」を担当している。このプロジェクトでは、震災以降、とりわけ介護・福祉領域の方々の震災発生から今に至る行動やそこにある思いなどについて話していただく機会を作っている。

そうした中で私が意識してお聴きしているのは「他の地域の人、この地域のこれからの人に一番伝えたいこと」が何かということである。この日本に住んでいる限り、いつでもどこでも地震を始めとする自然災害に遭遇する可能性はある。未曾有の大災害を踏まえて伝えたいことはどのようなことか、今回はこれまでの活動の中で得られたメッセージのうちいくつかを紹介していきたいと思う。

津波について

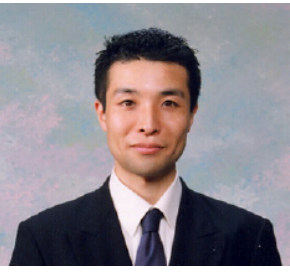
- ・地震が来たら津波!
- ・津波の時はいち早く高い所へ避難する。
- ・地震後6時間は自宅に戻るな! 「津波でんでんこ」。
- ・津波の情報が入ったら少しでも早く内陸部に逃げろ!
- ・大地震が来たらすぐに陸続きの高い場所に逃げて下さい。とにかく生き残る努力を。
- ・逃げるときは大きな声で叫んで逃げる。みんなに危険を知らせる。
- ・とにかく逃げろ!!! 戻るな!! 危険×

普段からの心構え

- ・まずは「個」で耐える力が必要。
- ・災害では周りは助けられない。まず自分で守るしかない。
- ・結婚したら海のそばに寄らないで(家を建てないで)。
- ・80超えた人は逃げられない。

執筆者紹介

大友浩平 (おおともこうへい)
奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。
「東北ブログ」
http://blog.livedoor.jp/anagmasi/



Facebook
https://www.facebook.com/kouhei.ootomo

い。初任給をもらったらぜひ祖母に車椅子をプレゼントして。

・住んでる所、職場で、高い所を確認、集合場所を決めておく。
・車は常に使えるようにしておく。車の燃料は半分になつたら給油する。

・皆、自分の所には来ない、大丈夫と思っている。海・山の災害を忘れずに準備してほしい。

・自分の住んでいる「地域」を知る。日常生活の中の「防災」「滅災」「備蓄」を話し合ひで、「普段」の生活で考える。

・起きないだろうと思っていたことも起こる可能性があるところから遠いほど、身近に感じられないもの。

・自分で生きる力を常日頃から意識していかないと。震災で動揺する人も、肝の据わった人もいた。生きる力、生きる知恵を。(震災を)知らない人には正しい情報を集めて残しておくことが必要。3日は我慢。

・日頃から訓練し、常に頭の中に置いておくべき。災害は時と所を選ばない。

震災を通じて感じたこと

- ・昨日までしゃべってた人でも死ぬんだなと思った。
- ・震災を機につながりが増えた。
- ・できることを一個一個やった結果として今がある。
- ・いい経験をしたと思う。

・本当に困っている人は支援がほしいと言えない。支援二丁ズの把握をいかに行うかが重要。

・震災はつらい出来事だけれど、それを乗り越えたからこそすばらしい出会いがあり、人と人との絆が深まったと思う。

・情報は信じる。そして共有する。「危ない」は「危ない」として対応する。何もなければそれでいい。後手に回つたら取り返しがつかない。

・行政はあてにはならない。利用者の家族、お付き合いのあった人、見ず知らずの人に助けられた。そうした関係を普段どれだけつくっておくか。

・津波から生き延びたその人が実は大変。助かった入所者に多大なストレスがあった。震災後に亡くなった人は、本来はもっと長く生きられたのではないか。

・震災で便利な生活が消えた。でも人と人のつながりが出来た。助け合わないと生活が築けない状態になつた。亡くなった人も多いため、実のある生活を知ることが出来た。

・「災害は起きる」を前提に、福祉に携わる人が協力して対応する仕組みづくりが必要。バラバラでは力を発揮できない。専門家が連携して対応する支援チームを複数つくらないと。

・災害は単独では来ない。人災もあるということをしつかり頭に入れて対応を。

情報が来ない、ガセ情報が来るのも人災。天災はしょうがないが、大きな災害に並行していろいろな不備が災いを大きくする。

・震災体験は、一時期「武勇伝」化して語られた。4年経つた今は忘れられ始めている。

・津波は憎い。でも、津波が取り持った縁もある。

震災を踏まえた地域づくり

・その地域に住む先人の経験を取り込んだ地域作り!!

・元々つながりが密な地域だったことが震災時の情報収集や発信にも活きた。

・今だからこそあのときのことを安心してはき出せる場が必要。そこからじゃないと未来は造れない。

・自分が、自分の身の回りの人や自分の先祖が体験したことを本当に活かせる情報の共有、コミュニティの形成が大切。

・助けが来るまでの助けはご近所。隣に誰が住んでいるかから始めて嫌がらずにご近所付き合いを。つながりは自分のため、人のため。

・日頃から地域のつながりを密にしておきたい。こういう人がいるというアピールをしてあげばいざという時声掛けくらいはしてくれられるかもしれない。

・「世のため人のため」が結局は自分のためになる。人を粗末にすれば自分も粗末にされる。

・被災者として、家族を助ける身として、ある程度覚悟が必要だということ。家族の安否をあれこれ考え出すと自分を保てなくなるので考えないようにした。利用者とスタッフを守るのが最優先だったのだから、生きていこうという思いが強い。

・まずは自分の命を守ることを。家族の命も優先してほしい。やりたいことをしてほしい。…つて自分にも言い聞かせて。

・人は日進月歩、成長しなければならぬ。停滞した見えたりしても、それは前進のための準備。

・東北にはいろいろな人がいる。他の地域の人は東北に学んでほしい。毎日楽しく生きて。苦しいことも悲しいことも含めて充実した1日を。

・現代の文明はありがたいが、いざという時はとても不便(使えないよ)。一人ひとりやる事はある。自信をもって生きて。隣の人を大切に。

・人は孤独ということを日頃から自覚して生きること。何か起きた時にどう動いたらいいか判断に迷つたら、自分の使命と、人とつながっていることを頼りに動いていく。

・他地域の人に伝えたいことは、管理者として、家族を助ける身として、ある程度覚悟が必要だということ。家族の安否をあれこれ考え出すと自分を保てなくなるので考えないようにした。利用者とスタッフを守るのが最優先だったのだから、生きていこうという思いが強い。

・被災者として、家族を助ける身として、ある程度覚悟が必要だということ。家族の安否をあれこれ考え出すと自分を保てなくなるので考えないようにした。利用者とスタッフを守るのが最優先だったのだから、生きていこうという思いが強い。

・被災後、その当時のことを話せる人は話していつて下さい。そして、聴いてください!!

・百聞は一見にしかず!! この街の「今」そして「これから」を何度でも見に来い! 美味しいもの食ってけらいいん!

・まずは自分の命を守ることを。家族の命も優先してほしい。やりたいことをしてほしい。…つて自分にも言い聞かせて。

・人は日進月歩、成長しなければならぬ。停滞した見えたりしても、それは前進のための準備。

・東北にはいろいろな人がいる。他の地域の人は東北に学んでほしい。毎日楽しく生きて。苦しいことも悲しいことも含めて充実した1日を。

・現代の文明はありがたいが、いざという時はとても不便(使えないよ)。一人ひとりやる事はある。自信をもって生きて。隣の人を大切に。

・人は孤独ということを日頃から自覚して生きること。何か起きた時にどう動いたらいいか判断に迷つたら、自分の使命と、人とつながっていることを頼りに動いていく。

・他地域の人に伝えたいことは、管理者として、家族を助ける身として、ある程度覚悟が必要だということ。家族の安否をあれこれ考え出すと自分を保てなくなるので考えないようにした。利用者とスタッフを守るのが最優先だったのだから、生きていこうという思いが強い。

・被災者として、家族を助ける身として、ある程度覚悟が必要だということ。家族の安否をあれこれ考え出すと自分を保てなくなるので考えないようにした。利用者とスタッフを守るのが最優先だったのだから、生きていこうという思いが強い。

・被災後、その当時のことを話せる人は話していつて下さい。そして、聴いてください!!

・百聞は一見にしかず!! この街の「今」そして「これから」を何度でも見に来い! 美味しいもの食ってけらいいん!

・まずは自分の命を守ることを。家族の命も優先してほしい。やりたいことをしてほしい。…つて自分にも言い聞かせて。

・人は日進月歩、成長しなければならぬ。停滞した見えたりしても、それは前進のための準備。

・東北にはいろいろな人がいる。他の地域の人は東北に学んでほしい。毎日楽しく生きて。苦しいことも悲しいことも含めて充実した1日を。

・現代の文明はありがたいが、いざという時はとても不便(使えないよ)。一人ひとりやる事はある。自信をもって生きて。隣の人を大切に。

・人は孤独ということを日頃から自覚して生きること。何か起きた時にどう動いたらいいか判断に迷つたら、自分の使命と、人とつながっていることを頼りに動いていく。

・他地域の人に伝えたいことは、管理者として、家族を助ける身として、ある程度覚悟が必要だということ。家族の安否をあれこれ考え出すと自分を保てなくなるので考えないようにした。利用者とスタッフを守るのが最優先だったのだから、生きていこうという思いが強い。

・被災者として、家族を助ける身として、ある程度覚悟が必要だということ。家族の安否をあれこれ考え出すと自分を保てなくなるので考えないようにした。利用者とスタッフを守るのが最優先だったのだから、生きていこうという思いが強い。

・被災後、その当時のことを話せる人は話していつて下さい。そして、聴いてください!!

・百聞は一見にしかず!! この街の「今」そして「これから」を何度でも見に来い! 美味しいもの食ってけらいいん!

・まずは自分の命を守ることを。家族の命も優先してほしい。やりたいことをしてほしい。…つて自分にも言い聞かせて。

・人は日進月歩、成長しなければならぬ。停滞した見えたりしても、それは前進のための準備。

・東北にはいろいろな人がいる。他の地域の人は東北に学んでほしい。毎日楽しく生きて。苦しいことも悲しいことも含めて充実した1日を。

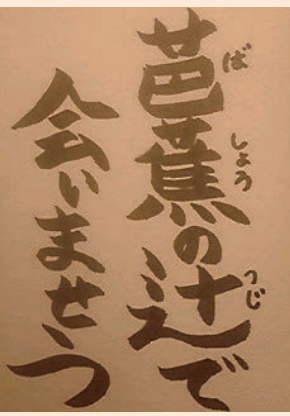
・現代の文明はありがたいが、いざという時はとても不便(使えないよ)。一人ひとりやる事はある。自信をもって生きて。隣の人を大切に。

・人は孤独ということを日頃から自覚して生きること。何か起きた時にどう動いたらいいか判断に迷つたら、自分の使命と、人とつながっていることを頼りに動いていく。

・他地域の人に伝えたいことは、管理者として、家族を助ける身として、ある程度覚悟が必要だということ。家族の安否をあれこれ考え出すと自分を保てなくなるので考えないようにした。利用者とスタッフを守るのが最優先だったのだから、生きていこうという思いが強い。

・被災者として、家族を助ける身として、ある程度覚悟が必要だということ。家族の安否をあれこれ考え出すと自分を保てなくなるので考えないようにした。利用者とスタッフを守るのが最優先だったのだから、生きていこうという思いが強い。

連載
むかしばなし



第三十話
榴ヶ岡への道

佐々木喜善と宮澤賢治が再開して熱を取り戻した議題は、昭和三年より未来の

「芭蕉さんは既に行かれたのですか。」
「おそろく。だが、決して話しては下しません。それが正しいでしょう。」
「人間はいづれ滅びますかな、賢治さん。」
「二十世紀は、これまでの人類の歴史とは違う異常さがあります。気がかりです。」



奥羽越現像氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、仙台に移住。市内のケルト音楽サークルに所属し、あちこち出演し演奏する。フィドル(ヴァイオリン)担当

膨張し、視界は雲海に遮られていたが、ある時点で急に息苦しくなり、両者思わず立ち上がった。
するとどうだろう！視界は全方位一気に開け、周囲の世界は全く一変していた。

「賢治さん、これは……！」
一面金色の眩い照り返し。どこを見渡しても、地平線まで果てしなく埋め尽くし広がる島の草原。信じ難い、恵みの光景だった。

「天界の……穀物。神の国の、飢饉知らずの……。」
興奮して、思わず穂の一房を両手で掴む賢治。稲でもなく、麦でもない。まして稗や粟でもない。色だけでなく、姿そのものが賢治すら未知の植物であった。

しかし、賢治の手は次の動作に移らない。
「これを刈り取って、良いのだから。」
そもそもここは本当に、天界なのか。大天狗が見せる壮大なイリュージョンに過ぎないのではないかと、喜善が言う。

「賢治さんがこの穂を持ち帰れば……岩手、奥羽中の飢饉に終止符が打たれましようか。」
「だと、いいのですが……」
意を決したか、賢治は上

着のポケットから肥後守を取り出して刃を開いた。
「では、御免。」
そうやって、穂の付け根に刃を立てた、その時だ。

上空にグオンという奇怪な音が響いて、巨大な影が二人への日差しを遮った。
空に、何かが浮いている。賢治には、始めそれが身体

の太い蟻螂(あまぎ)に見え、すぐにオケラや、むしろ海のシャコの方に近い、と連想した。
影はゆっくり高度を下げて、正面を二人に向けて黄金の平原に着地した。その

本体は驚くほど巨大で、まさにシャコそっくりの二つの目の高さは機関車八六二〇型の煙突ぐらいあるのだった。
巨大な腹部の下で無数の脚が複雑に動いて、一瞬にして数百本の穂が刈り取られた。収穫された穂はやはり脚の見事な動きで、漏れなくシャコの鉄の蓋が開いた体内に運ばれる。

賢治と喜善は呆気にとられていた。これは明らかに海の生物を模した、農業用の機械なのだ。自分たちのいた二十世紀始めの産物とはとても思えない。ただはつきりした事は……
ここは、神の国ではない。

ここは、神の国ではない。

「久しぶりであるな……チャンルー殿。」
守隅青年の姿を借りた大天狗綾糟は「城塞都市」が乗る天守台の地下に降りていた。芭蕉と憲家は同行を許されず、男性の側近も、地下牢へ歩いていく綾糟を遠目に見守るのみだ。

地下牢の一角に、格子は掛けてあるが非常に整備された居住空間があり、二人の女武者が番兵として控えている。牢の中にいるのはチャンルー・その両目ははつきりと見えていた。
「随分と美男になったな、綾糟。トヨには会えるか」
「近くにいる。もうすぐ、ここへ着くだろう。」
女の問いに、澁みなく大天狗は答える。

「藤原が、国境を示したらしいな。朝廷はトヨを必要とするだろう。血眼になって、攻めてくるぞ。」
「未来は、示された。七百年先の世界からやってきた子どもがいる。蝦夷の国はこれより長い眠りにつく」
「では、トヨは去るのだな。またも我ら蝦夷を裏切り、ヤマトへ鞍替える訳だ」
蜂娘は壁に寄りかかって軽蔑を露わにする。

「トヨが奥羽を裏切った事など、一度としてない。奥羽は七百年後も存続している。トヨは奥羽を離れぬ」
「そんな事を私と、話した

くて来た訳ではないだろう、綾糟。イアンパヌに会えるか、否か……私次第なのだからな。」
チャンルーが、妻の名をちらつかせる。
「俺は、この身体を得て、今こそ下界へ降り再び戦う所存である。チャンルーよ、会わせてもらえるか。」
「ここから、私を解放するのなら、考えぬでもない。」
「無論だ。我が息子も、今戦地にある。せめて一度、母子を会わせたい。」

泉三郎忠衡が、独り十万の大軍を迎え撃とうと、広瀬川の岸辺に立つているのが感じ取れた。女は言った。
「だがな。私も一族の裏切り者の烙印はまつびらでね。お前が気の済むまでやり尽くしたら、必ず私はお前を殺す……だから全てを今日のうちに終わらせる事だ。」

石川善助は自ら知り尽くした、仙臺城下を想像しながら、その都市が作られる以前の草原を北東へ歩いてきた。この辺りが東北学院だ。な……五橋を過ぎて、そろそろ鉄道線路のはずだ。
善助は孤独だったが、意志は透明で、爽やかだった。俺はこの町を、やがて去るだろう。だがその前にこうしておくのが、俺が仙臺人として生まれ来た使命だ。
遠くで汽笛が鳴るのが聞こえた。賢治たちをここへ連れて来た機関車だ。少し北に停まっているはずだ。

ふと草原の中に気配を感じて目をやると、灰色の毛の野犬の姿を認めた。いや、違う。尾が下に垂れており、鋭い目に精悍な威厳を湛えている……これは、狼か。
それはどうやら一匹狼で、片足を引き摺りながらも一心不乱に進む人間に対し攻撃の色は見せていない。善助もチラリチラリとその姿に興味深げな視線を送るが、一度、二度と大きく転倒すると思いついたように前を見据えまたひたすら歩き出すのだった。
彼らも滅びるのか……俺の時代には。
鉄道線路を越えれば、寺の町。そのすぐ先が、目指す所……榴ヶ岡だ。
最後に残った、石の置き場所、それが一番の難所だ。何が起きるか、わからんぞ。お前もお供するか？ 狼よ。

高衡は促した。
「ここから、鞭楯の森へ出られよ。そこが最も、貴女方の乗り物の場所に近い」
あらためて若は、少年武者の凛々しい顔を見つめた。「三姉妹は極めてお喋りです。気をつけないと、更に北の達谷窟に出してしまします。」
冗談のような話だが、どうも本当らしい。
「達谷……平泉の、近くです。」
この本吉冠者高衡も、おそらく歴史に名を刻んでいるだろうが、少女にそこまでの知識はなく、この少年のその後の運命など知る由もなかった。
「どうか自分を大切になさって下さい……四郎さん。」
「有難うございます、若どのお会いできて良かったです」
「私も、楽しかったです。」
二人はそと互いの手に触れ、やがて固い握手を果たしたのだった。

「これまでです……若どの、お逃げなされませ。」
高衡は、ついに落城の時を少女へ告げた。名取高館の森は尚も鎌倉の大軍を飲み込み続けているが、徐々にその前線は森の奥へ奥へと後退し、あたかも高波が岩へ押し寄せてくるようだ。少年は若の手を引いて城砦裏手の森へ降りていった。その奥に三本の老いた巨大な樺の樹があつて、巴のよう

に寄り添い合っているのだった。
「三姉妹です。彼女らの、中心へどうぞ、若どの。」
圧倒されている少女を、

遠征軍に協力すると申し出た地元の老人が、答えた。「右手に郡山の群落があり、西は茂ヶ崎(後の大年寺山)が聳えておる。更に西にあるのが烏鬼森じゃ。」
「おどがもり……とは」
「わしらの神がおはす山。怖ろしい力がある……挨拶をしていかにあ、いかに」
「また、挨拶であるか……」
「さもなければ藤元の郡山すらまかり通る事はできません。二本の大河の合流にせき止められ、烏鬼森の力が降りて溜まっている。」
「どういった神がおはすか」
「大昔、天より落ちた星を種として発した巨樹あり。それを登り天に達した名取太郎が、樹が切り倒されて落下、鬼となったものじゃ」
「鬼ならば調伏すべし。我が八幡神を頂に勧めようぞ。」
「お、怖ろしき事を。それは何卒、御戯言のみにて。」
老人は突然、青ざめてひどく震え始めた。

その後進軍を始めて半刻「何者か、おります。川の前」に独り、馬上にありますが、いや、待て、あれは！
梶原景時の声が詰まった。頼朝の目にも、確認できる。馬上の武者の、首がないのだ。
「幻術では？ 首なし武者など、あり得ない！」
先鋒隊が騒然とする中、頼朝はその正体を見定めていた。国衡だ……白石川の岸辺で射抜かれ、大高宮

の田地で首を取られた、その残りの胴体という事か。先鋒は誰も恐れて、立ち向かおうとしない。頼朝は遠目に紛れている和田義盛に向かつて叫び、命じた。
「小太郎、撃て！ 今度こそ撃ち損じるな。」
義盛はしかし、既に弓を手にし、矢を番えていた。馬を駆り、前方の兵士らに怒号を飛ばして退かせ、たちまち首なし武者との距離を詰めていった。
その時だ。馬上の首なし男の右腕が動き、ひどく長い太刀を引き抜いて、天上へ差し上げるのが見えた。かと思つた次の瞬間には黒い馬が走り出し、向かう義盛とは別の方向へ、まっしぐらに突進していった。
頼朝は目を剥いた。首なしの化け物は、紛れもなく自分のいる地点へ向かつている。己！ 何という土地だ。坂東王の血を求めた太刀が空中で照り返す陽光は、既に夕焼けのような鮮烈なる紅さで頼朝の目に焼きつくのだった。

次回予告
待て、善助さんより前に芭蕉さんは青葉山山頂に石を置くのか？
そして賢治さんは、巨大な寿司ネタをモノにできるのか！？

三姉妹です。彼女らの、中心へどうぞ、若どの。」
圧倒されている少女を、



シリーズ 遠野の自然 「遠野の立冬」 遠野 1000 景より

今年の立冬は十一月八日
でした。

立冬とは、まさしく冬のはじまりということ、北の地方の山には初冠雪の知らせが届きはじめる頃でもあり、平地でも初霜が降りる季節でもあります。そして今年も残すところ



水鏡



紅葉と石塔と

あとひと月半となりました。ほんとに月日の経つのは早いものです。いまでも今年の正月の様

子がまざまざと思ひ出せるというのに、もう来年の正月のことを考えなければなりません。いわば、現在進

行中の今年の時間と来るべき来年の時間がクロスオーバーする季節ともいえます。また、還暦を二年過ぎた



靡くススキ



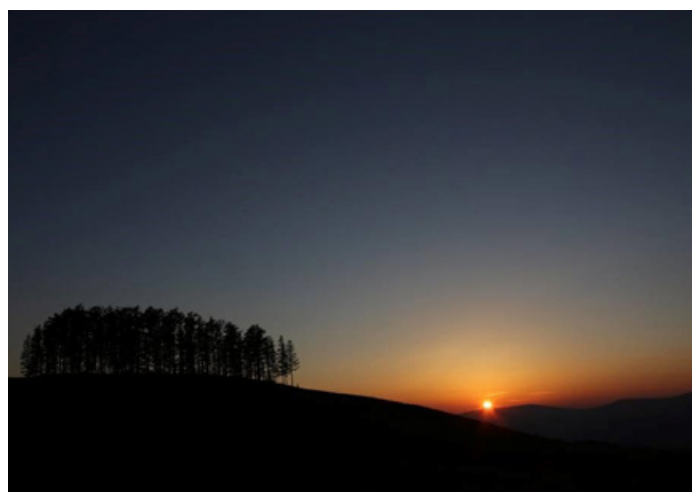
仙人 砂防ダム

筆者も、最近では健康寿命(健康上の問題がない状態で日常生活を送れる期間のこと)を考え始めましたが、カレンダールの進行が、健康寿命の終了に向けてのカウントダウンのようにとっても生々しく聞こえてくるようにもなりました。

これらがからまり合って、寒がりの筆者にとつては、十一月から始まる季節は少々苦手ということもあり、カレンダールの立冬と寒さ到来と人生の冬場を迎えることがなぜか重なって感じられる季節となりました。

*

今回号の「遠野の立冬」には、まだ初冠雪や初霜の写真はありませんが、霜は降りたようで、寒い中にも澄み切った空や紅葉の終わりの様子を伝える写真が満載です。まずは「水鏡」。晴れて



夕日

はいませんが、冷えた空気がピンと張りつめて、紅葉の様子が、水面にはつきりと写り込んで、とても凛とした気分になります。

紅葉も鮮やかです。色とりどり、アングルも様々ですが、まるでモノトーンの冬を迎える前の色彩満載の秋の花火のようにも見えます。

夕日も印象深い景色です。特にこの季節の夕日は、太陽が冬至で生まれ変わる直前の最後の光を放っているようにも見えます。ススキも弱い光を浴びながら、冷たい風に靡いています。いまにも冷たい風の音が聞こえてきそうです。そうしたなかでの「鹿参進」。鹿装束の鮮やかな色が境内を進む様子が、紅葉の色とだぶって見え、まさに動く紅葉の様相を呈しています。



紅葉



鹿参進



秋色

石巻に新しい復興の風を。

若者が中心となって立ち上げたNPO法人が新しい手法で風力発電所開発に挑戦する！ -NPO法人STELAのプロジェクトのレポート-



2012年12月の第1回発起人会の様子

2012年の12月。法人設立のための発起人会を開催した。まだ法人名すら決まらず、集ってくれた友人たちに向けて、このプロジェクトに賛同してくれるなら仲間になってくれないかと呼びかける会だった。市民の出資によって自然エネルギーの発電所を作る。そのためには任意団体ではなく、きちんとした法人が必要なのだ。

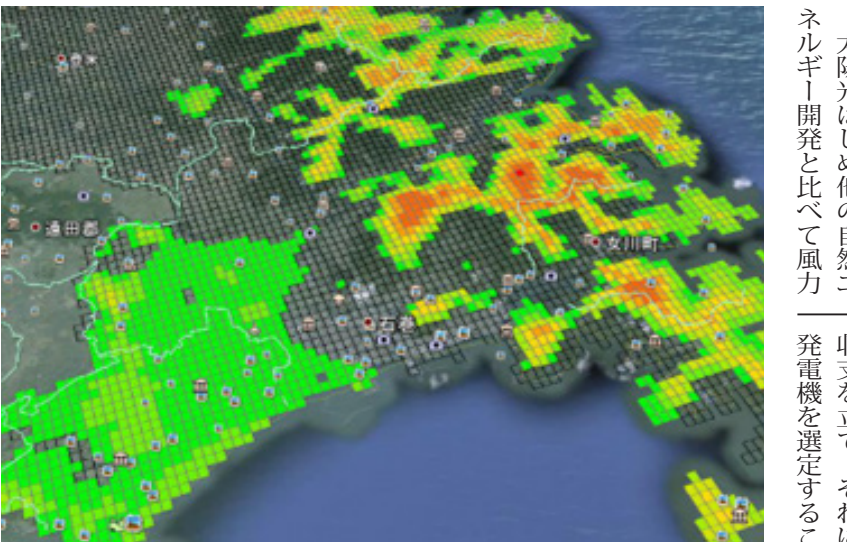
特定非営利活動法人を作るにはまず、活動に賛同する10名の社員と役員が必要となる。集まってくれた友人たちに何も強制はしなかった。社員だけではなく理事などの役員となるとそれなりに責任も発生するのだ。

会員への利益というのは何もない。成功の保障も。逆に失敗すれば億単位の損失も出る可能性もある。仙台で、石巻で、東京で、法人設立のための本場に小さな説明会を開催し、法人設立へ向け会員が集まった。初期メンバーは11名、平均年齢は27歳だった。法人の目標は発電事業を行うことだが、電力の技術者だった者は初代理事長の私のみ。誰一人として同じ職業ではない。

石巻の風が持つ可能性を確認

もちろん初めての経験であり、マニュアルを片手に定款をはじめとする書類の作成を朝晩の仕事の合間に行う。メンバーの協力と仙台市役所の市民活動推進課の丁寧な対応のおかげで何とか形になり、2013年5月に法人格を取得。まずは第一ステップクリアだ。

黎明期の国内風力発電事業の失敗の多くは風の精査ミスによるところも多い。シミュレーション上の風速データというのは容易に入手することができ、事業の見直しをしっかりと立てるには風況観測ポールを使う。実際データを入手し、事業を行うに足るかを精査する必要がある。



石巻市周辺の風速シミュレーション
色が付いている部分が事業化検討地域となる

風は地形によっても年度によっても変わるうえ、観測ポール一基で数百万円から一千万円程の調査費用が必要となる。実際に測ってみてやはり難しいという例は少なくない。更にはそれが事業に見合う風だとしても建設には多くの法律に適合しなければいけないのだ。

太陽光はじめ他の自然エネルギー開発と比べて風力発電が難しいというのはここにあり。風の偏在性に加えて初期投資額の大きさ、精査までの期間と風に合わせた機種選定などの専門性。だからこそ我々が挑戦する必要があるのだ。

詳細は申し上げることができないが、とある大きな機関の協力を得られ、我々は建設を検討するエリアの石巻の風の実測データを得ることができた。



本部がある仙台にて行われた2014年度通常総会の様子。
メンバーは毎年増員し、20~80代まで様々な層が参加している。

それだけではない。発電所開発に必要な周辺環境の調査データの入手。これは発電事業を行うことで周囲の生態系へ与える影響を画ることができ、現状では全ての法律に適合していることがわかった。さて、次の問題は事業の収支を立て、それに見合う発電機を選定すること。

風に合わない発電機を選んで失敗した例も多い。以前であれば取引ができたであろうメーカーが国内から撤退しており、業界再編の動きも大きく影響した。国内の自然エネルギー開発は潤沢な利益を得られる太陽光発電に集中して、風力発電開発の市場は縮小し、世界的なトレンドであるグローバルな風力関連企業は国内からほとんど撤退して海外にある可能性の大きな市場に拠点を移したのだ。以前は導入できた優秀な発電機を使えない。

何であれ事業を行うには無数の問題を解決しなければならぬ。我々も事業が始まる前から問題が山積みだった。風の実測データを得られたのはいいがどう検討しても事業性が見えない。つまり大赤字なのだ。これには様々な理由がある。

風に合わない発電機を選んで失敗した例も多い。以前であれば取引ができたであろうメーカーが国内から撤退しており、業界再編の動きも大きく影響した。国内の自然エネルギー開発は潤沢な利益を得られる太陽光発電に集中して、風力発電開発の市場は縮小し、世界的なトレンドであるグローバルな風力関連企業は国内からほとんど撤退して海外にある可能性の大きな市場に拠点を移したのだ。以前は導入できた優秀な発電機を使えない。

例えば私が技術者だったときに作られていた発電機はkW当たり25万円程度であったが、現在は30万から40万円となっている。出力が大きくなり、大量生産が行われ、技術革新を経ていくにつれて発電機の価格が上がっているのだ。自然エネルギー普

及の為に施行された固定価格買取制度によって確かに買い取り価格は倍になり長期間に亘って価格が保証されているがその分、補助金がなくなり発電機価格の上昇が追い討ちとなる。加えて震災による既設配電線の喪失、建設予定地の地盤の脆弱性。想定される建設単価は40万円を優に超える。解決策として海外の成功事例を取り入れようとしても国内の建設基準には見合わなかった。

発電機選定にも大変苦労した。風力発電機と一重に言ってもその種類は大変に多い。車と同じでトヨタとフェラーリ、スズキとベンツが全く異なるように風力発電機も開発国やメーカーでその性格も出力も大きく異なるのだ。

来月号の記事

来月号(12月16日発行)では我々の活動の広がりや県内外の協力団体について交えながら活動を紹介する予定である。

寄稿者プロフィール

東梅祐也
(とうばいゆうや)
石巻市出身。

エンジニアを志し、石巻工業高校電気科、東北学院大学電気情報工学科、同大学大学院にて修士号を取得。現場での仕事に従事するために博士課程を中退する。

幼い頃から動物が好きで、将来は環境問題の解決に貢献できる仕事につきたかったが、徹底した現場人間のため、大学院時代に社会問題の現場を肌で感じるために環境問題・戦争・貧困をテーマに地球一周の一人旅へ。



帰国後は反原発、植林、ゴミ拾い、反戦デモにチャリティイベント、自身の旅のトークライブなど様々な活動を行う。東日本大震災を機にエンジニアを退職してからは宮城に戻り法人設立。現在は理事として活動に従事している。発電所の管理に必要な電気主任技術者の有資格者でもある。

第41号 ネットアンケート集計結果

【復興リーダーたちについて】

NO.	質問と選択肢	回答数
①	住所	
	(1) 東北被災地	6
	(2) 被災地以外の東北	4
②	性別	
	(1) 男性	15
	(2) 女性	1
③	年齢	
	(1) 20歳未満	0
	(2) 20歳以上40歳未満	2
	(3) 40歳以上60歳未満	9
④	復興リーダーたちに満足しているか	
	(1) まあ満足している	0
	(2) 不満	5
	(3) 大いに不満	9
⑤	復興リーダーたちの課題・問題は何か	
	(1) 復興予算不足	0
	(2) 被災地・被災者との一体感不足	11
	(3) リーダーシップ不足	3
⑥	課題・問題点をどうしたらいいか?	
	(1) 仕方ないとあきらめる	3
	(2) ふさわしいリーダーをさがす	8
	(3) 自らリーダーの役割を引き受ける	0
⑦	どんな復興リーダーがいいか?	
	(1) 復興予算を勝ち取ってくるリーダー	1
	(2) 強烈なリーダーシップで引っ張るタイプ	3
	(3) 被災地・被災者に寄り添うリーダー	7
⑧	どの復興リーダーにもっと権限を与えるか?	
	(1) 復興大臣と復興庁	0
	(2) 被災県の知事や市町村長	6
	(3) 新しいポストを作る	5
⑨	満足できる復興リーダーは見つかるか?	
	(1) 待てば必ず見つかる	4
	(2) 無理とあきらめる	1
	(3) 復興体制改革により見つかる可能性がある	6
⑩	厳しい要求を突きつけるリーダーはどうか?	
	(1) 信頼できるならば受け入れる	9
	(2) そもそも復興実現性が疑問だからイヤだ	1
	(3) 厳しすぎるリーダーは嫌いだ	2
(4) いずれでもない	4	



今回は「復興リーダーたちについて」ワールドカップラグビーでの日本の活躍を引き出したリーダーのエディー・ジョーンズ。もしこうした人物が東北復興のリーダーだったらと夢想したのは筆者だけではないはず。翻って、実際の東北復興リーダーたちを考えたらどうなるかについて聞いてみた。回答者数は十六名。

「復興リーダーたちに満足しているか」はやはり「大いに不満」と「不満」合わせて約88%。「復興リーダーたちの課題・問題は何か」は「被災地・被災者との一体感不足」が約69%、「リーダーシップ不足」が約19%。「課題・問題点をどうしたらいいか?」は「ふさわしいリーダーをさがす」が50%、「仕方ないとあきらめる」が約19%。「どんな復興リーダーがいいか?」は「被災地・被災者に寄り添うリーダー」が約44%、「強烈なリーダーシップで引っ張るタイプ」は約19%。「どの復興リーダーにもっと権限を与えるか?」は「被災県の知事や市町村長」が約38%、「新しいポストを作る」が約31%。「満足できる復興リーダーは見つかるか?」は「復興体制改革により見つかる可能性がある」が約38%、「待てば必ず見つかる」が25%。「厳しい要求を突きつけるリーダーはどうか?」は「信頼できるならば受け入れる」が約56%という結果だった。

「復興リーダーたちにもっと権限を与えるか?」は「被災県の知事や市町村長」が約38%、「新しいポストを作る」が約31%。「満足できる復興リーダーは見つかるか?」は「復興体制改革により見つかる可能性がある」が約38%、「待てば必ず見つかる」が25%。「厳しい要求を突きつけるリーダーはどうか?」は「信頼できるならば受け入れる」が約56%という結果だった。

「復興リーダーたちにもっと権限を与えるか?」は「被災県の知事や市町村長」が約38%、「新しいポストを作る」が約31%。「満足できる復興リーダーは見つかるか?」は「復興体制改革により見つかる可能性がある」が約38%、「待てば必ず見つかる」が25%。「厳しい要求を突きつけるリーダーはどうか?」は「信頼できるならば受け入れる」が約56%という結果だった。

「復興リーダーたちにもっと権限を与えるか?」は「被災県の知事や市町村長」が約38%、「新しいポストを作る」が約31%。「満足できる復興リーダーは見つかるか?」は「復興体制改革により見つかる可能性がある」が約38%、「待てば必ず見つかる」が25%。「厳しい要求を突きつけるリーダーはどうか?」は「信頼できるならば受け入れる」が約56%という結果だった。

編集後記

今回の新聞記事を書くために久しぶりに東北震災発生直後のたくさんさんの写真や動画をじっくり見た。そうしたら、筆者もいつの間にか、当時けつして忘れないとした心のショックを忘れ、安定した日常に逃げ込んでいたことに気づかされた。

人はいつもいつも緊張状態に身を置くことはむずかしい。緊張したら弛緩したい。緊張は長続きしない。人間の仕組みとしてそうなっている。そこはどうしようもない。

しかし、東北震災が突きつけた課題は、途方もなく大きな緊張を強いるものである。その課題をそうした日常生活の一部に埋没させてはならないと言いつけているように思えたのだ。

むしろ、大震災は、そうしたありふれた日常生活の根本の価値観を大改革する機会を差し出したとも言えると思うのである。

しかし、この課題を検討するのは大作業である。途方もない広がりや時間を大きく遡ることが求められるだろう。

震災発生から四年八ヶ月が経過した。逆に、いまだからこそ冷静にその課題に向き合えるのではないかと。決して課題を矮小化せずに、ありのままに、無理に決着させずに、真剣に向き合う必要があると思う。

「東北を世界に！」プロジェクト募集

- プロジェクト募集要領
- ① 東北の復興、活性化、再興を目的としたプロジェクト企画であれば、何でも可
- ② 応募資格は特に定めず、被災地、被災地以外の居住も問わず、国籍・年齢・性別を問わず
- ③ 企画書のようなものがあれば可---形式自由(プロジェクト名、プロジェクト期間、目的、どうやって実現するかの手段、仲間などを明記していただきたいと思ひます)
- ④ 〆切はとくに設けません

「東北を世界に！」プロジェクト募集

- 連絡先/企画提出先(郵送) 〒207-0005 東京都東大和市高木3-315-1 ホームタウン宮前2-2 電子タブloid新聞【東北復興】宛
- (メール) yumuyu@wj8.so-net.ne.jp
- ご提案いただいた企画については、当新聞で責任をもって検討させていただいた上で、企画開始に向けてのしかるべき方法・手段をご提案するなり、企画実現のための仲間を募ってまいりたいと考えております。また、当新聞でご紹介させていただきたいと思ひます。(氏名公表か非公表かはご相談)
- たくさんのご提案をお待ちしています